

あいびき

イワン・ツルゲーネフ Ivan Turgenev

二葉亭四迷訳

青空文庫

このあいびきは先年仏蘭西フランスで死去した、露国では有名な小説家、ツルゲーネフという人の端物はものの作です。今度徳富先生の御依頼で訳してみました。私の訳文は我ながら不思議とソノ何んだが、これでも原文はきわめておもしろいです。

秋九月中旬というころ、一日自分がさる樺かばの林の中に座していたことがあつた。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生ま煖あたたかな日かげも射して、まことに気まぐれな空ら合い。あわあわしい白ら雲が空ら一面に棚引くかと思うと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、むりに押し分けたような雲間から澄みて伶俐さかし氣げに見える人の眼のごとくに朗ほからかに晴れた蒼空かすがのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上かすで幽こよかに戦そよいだが、その音を聞たばかりでも季節は知られた。それは春先する、おもしろそうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなお饒舌しゃべりでもなかったが、ただようやく聞取れるか聞取れぬほどのしめやかな私語の声であつた。そよ吹く風は忍ぶように木末を伝ツた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中のようにすが間斷な

く移り変った。あるいはそこにありとある物すべて一時に微笑したように、隈なくあかみわたって、さのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は思いがけずも白絹めく、やさしい光沢を帯び、地上に散り布いた、細かな、落ち葉はにわかに日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしったような「ペアポロトニク」（蕨の類い）のみごとな茎、しかも熟えすぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして、目前に透かして見られた。

あるいはまたあたり一面にわかに薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立ちも、降り積ったままにまだ日の眼に逢わぬ雪のように、白くおぼろに霞む——と小雨が忍びやかに、怪し気に、私話するようにパラパラと降って通った。樺の木の葉はいちじるしく光沢は褪めていてもさすがになお青かった、がただそちこちに立つ稚木のみはすべて赤くも黄ろくも色づいて、おりおり日の光りが今ま雨に濡れたばかりの細枝の繁味を漏れて滑りながらに脱けてくるのをあびては、キラキラときらめいていた。鳥は一ト声も音を聞かせず、皆どこにか隠れて窺まりかえっていたが、ただおりふしに人をさみした白頭翁の声のみが、故鈴でも鳴らすごとくに、響きわたった。この樺の林へ来るまえに、自分は獵犬を曳いて、さる高く茂った白楊の林を過ぎたが、この樹は——

白揚は——ぜんたい虫がすかぬ。幹といえ、蒼味がかった連翹^{れんぎょういろ}色で、葉といえ、鼠^{ねずみ}みともつかず緑りともつかず、下手な鉄^{かなもの}物細工を見るようで、しかも長い^{たけ}っぱいに頸^{けい}を引き伸して、大団扇^{おおうちわ}のように空中に立ちはだかつて——どうも虫が好かぬ。長たらしい莖^{こぎ}へ無器用にヒツつけたような薄きたない円葉をうるさく振りたてて——どうも虫が好かぬ。この樹の見て快よい時といつては、ただ背びくなく灌木の中央に一段高く聳^{そび}えて、入り日をまともに受け、根本より木末に至るまでむらなく樺色に染まりながら、風に戦^{そよ}いでいる夏の夕暮か、——さなくば空名^{なご}残りなく晴れわたって風のすさまじく吹く日、あおそらを影にして立ちながら、ザワザワざわつき、風に吹きなやまされる木の葉の今にも梢をもぎ離れて遠く吹き飛ばされそうに見える時か。とにかく自分はこの樹を好まぬので、ソコデその白楊の林には憩^{やすみ}わず、わざわざこの樺の林にまで辿^{たど}りついて、地上わづか離れて下枝の生えた、雨凌^{しの}ぎになりそうな木立を見たてて、さてその下に栖^{すみ}を構え、あたりの風景を眺めながら、ただ遊獵者のみが覚えのあるという、例の穏かな、罪のない夢を結んだ。

何ン時ばかり眠ッていたか、ハッキリしないが、とにかくしばらくして眼を覚ましてみると、林の中は日の光りが到^{くま}らぬ隈もなく、うれしそうに騒ぐ木の葉を漏れて、はなやか

に晴れた蒼空がまるで火花でも散らしたように、鮮かに見わたされた。雲は狂い廻る風に吹き払われて形を潜め、空には纖雲一ツだも留めず、大氣中に含まれた一種清涼の気は人の気を爽かにして、穏かな晴夜の来る前触れをやるかと思われた。自分はまさに起ち上りてまたさらに運だめし（ただし銃獵の事で）をしようとして、フト端然と坐している人の姿を認めた。眸子を定めてよく見れば、それは農夫の娘らしい少女であつた。二十歩ばかりあなたに、物思わし氣に頭を垂れ、力なさそうに両の手を膝に落して、端然と坐していた。旁々の手を見れば、半はむきだしで、その上に載せた草花の束ねが呼吸をするたびに縞のペチコートの上をしずかにころがっていた。清らかな白の表衣をしとやかに着なして、咽喉元と手頸のあたりでボタンをかけ、大粒な黄ろい飾り玉を二列に分つて襟から胸へ垂らしていた。この少女なかなかの美人で、象牙をも欺むく色白の額ぎわで巾の狭い緋の抹額を締めていたが、その下から美しい鶉色で、しかも白く光る濃い頭髮を丁寧に梳したのがこぼれでて、二ツの半円を描いて、左右に別れていた。顔の他の部分は日に焼けてはいたが、薄皮だけにかえつて見所があつた。眼ざしは分らなかつた、――始終下目のみ使っていたからで、シカシその代り秀でた細眉と長い睫毛とは明かに見られた。睫毛はうるんでいて、旁々の頬にもまた蒼さめた唇へかけて、涙の伝った痕が夕日には

えて、アリアリと見えた。総じて首つきが愛らしく、鼻がすこし大く円すぎたが、それすらさのみ眼障りにはならなかつたほどで。とり分け自分の氣に入ツたはその面^{おも}ざし、まことに柔和でしとやかで、とり繕^もろツた氣色は微塵^{みじん}もなく、さも憂わしそうで、そしてまたあどけなく途方に暮れた趣きもあツた。たれをか待合させているのとみえて、何か幽かに物音がしたかと思うと、少女はあわてて頭を擡^{もた}げて、振り反つてみて、その大方の涼しい眼、牝鹿のもののおどおどしたのをば、薄暗い木蔭でひからせた。クワツと見ひらいた眼を物音のした方へ向けて、シゲシゲ視詰めたまま、しばらく聞きすましていたが、やがて溜息を吐いて、静にこなたを振り向いて、前よりはひとときわ低く屈みながら、またおもむろに花を拭^えり分け初めた。擦^すりあかめたまぶちに、厳しく拘^{こう}攣^{れん}する唇、またしても濃い睫毛の下よりこぼれでる涙の雫^{しずく}は流れよどみて日にきらめいた。こうしてしばらく時刻を移していたが、その間少女は、かわいそうに、みじろぎをもせず、ただおりおり手で涙を拭いながら、聞きすましてのみいた、ひたすら聞きすましてのみいた……フとまたガサガサと物音がした、——少女はブルブルと震えた。物音は罷^やまぬのみか、しだいに高まって、近づいて、ついに思いきツた濶^{かつ}歩^ぽの音になると——少女は起きなおツた。何となく心おくれのした氣色。ヒタと視詰めた眼ざしにおどおどしたところもあツた、心の焦ら

れて堪えかねた気味も見えた。しげみを漏れて男の姿がチラリ。少女はそなたを注視して、にわかにハツと顔を赧らめて、我も仕合とおもい顔にニツコリ笑ツて、起ち上ろうとして、フトまた萎れて、蒼ざめて、どきまぎして、——先の男が傍に来て立ち留つてから、ようやくおずおず頭を擡げて、念ずるようにその顔を視詰めた。

自分はお物蔭に潜みながら、怪しと思う心にほだされて、その男の顔をツクツク眺めたが、あからさまにいえば、あまり気には入らなかった。

これはどう見ても弱冠の素封家の、あまやかされすぎた、給事らしい男であつた。衣服を見ればことさらに風流をめかしているうちにも、またどことなくしどけないのを飾る気味もあツて、主人の着故るしめく、茶の短い外套をはおり、はしばしを連翹色に染めた、薔薇色の頸巻をまいて、金モールの抹額をつけた黒帽を眉深にかぶツていた。白襦衣の角のない襟は用捨もなく押しつけるように耳朶をえて、また両頬を擦り、糊で固めた腕飾りはまったく手頸をかくして、赤い先の曲ツた指、Turquoise（宝石の一種）製のMyosotis（草の名）を飾りにつけた金銀の指環を幾個ともなくはめていた指にまで至ツた。世には一種の面貌がある、自分の觀察したところでは、つねに男子の気にもとる代り、不幸にも女子の気に適う面貌があるが、この男のかおつきはまったくその一ツで、桃色で、

清らかで、そしてきわめて傲慢ごうまんそう。己があらけない貌かおだちに故意わざと人を軽ろしめ世に倦うみはてた色を装おうとしていたものとみえて、絶えずたださえ少ちいさな、薄白く、鼠ばみた眼を細めたり、眉をしわめたり、口角を引き下げたり、しいて欠伸あくびをしたり、さも気のなさそうな、やりばなしな風を装うて、あるいは勇ましく捲き上ツたもみあげを撫でてみたり、または厚い上唇の上の黄ばみた髭を引張てみたりして——ヤどうも見ていられぬほどに様子を売る男であツた。待合せていた例の少女の姿を見た時から、モウ様子を売りだして、ノソリノソリと大股にあるいて傍へ寄りて、立ち止ツて、肩をゆすツて、両手を外套のかくしへ押し入れて、気のなさそうな眼を走らしてジロリと少女の顔を見流して、そして下にいた。

「待ツたか？」ト初めて口をきいた、なおどこをか眺めたままで、欠伸をしながら、足を揺うごかしながら「ウー？」

少女はきゆうに返答をしえなかつた。

「どんなに待ツたでしょう」トついにかすかにいッた。

「フム」ト言ツて、先の男は帽子を脱した。さももったいらしくほとんど眉ぎわよりはえだした濃い縮れ髪を撫でて、鷹揚おうようにあたりを四顧みまわして、さてまたソツと帽子をかぶツて、

大切な頭をかくしてしまった。「あぶなく忘れるところよ。それにこの雨だもの！」トまた欠伸。「用は多し、そうそうは仕切れるもんじやない、そのくせややともすれば小言だ。トキニ出立は明日になつた……」

「あした！」ト少女はビツクリして男の顔を視詰た。

「あした……オイオイ頼むぜ」ト男は忌々し^{いまいま}そうに口早に言ツた。少女のブルブルと震えて差うつむいたのを見て。「頼むぜ『アクーリナ』泣かれちやアあやまる。おれはそれが大嫌いだ」。ト低い鼻に皺を寄せて、「泣くならおれはすぐ帰ろう……何だばか氣た——泣く！」「アラ泣はしませんよ」、トあわてて「アクーリナ」は言ツた、せぐりくる涙をようやくのことで呑みこみながら。しばらくして、「それじゃ明日お立ちなさるの。いつまた逢われるだろうネー」

「逢われるよ、心配せんでも。さよう、来年——でなければさらいねんだ。旦那は彼得^{ペテルブ}堡^{ルグ}で役にでも就きたいようすだ」、トすこし鼻声で氣のなさそうに言ツて「ガ事に寄ると外国へ往くかもしれん」。

「もしそうでもなツたらモウわたしの事なんざア忘れておしまいなさるだろうネー」ト言ツたが、いかにも心細そうであツた。

「なぜ？ だいじようぶ！ 忘れはしない、ガ『アクーリナ』ちツとこれからは気をつけるがいいぜ、わるあがきもいい加減にして、おやじの言うこともちツとは聴くがいい。おれはだいじようぶだ、忘れる気遣いはない、——それはなア……イ」、ト平気で伸のびをしなから、また欠伸をした。

「ほんとに、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、忘れちゃアいやですよ」。ト少女は祈るがごとくに言ツた、

「こんなにお前さんの事を思うのも、慾徳よくとくずくじゃないから……おとっさんのいうこと聴けとおいいなさるけれど……わたしにはそんなこたアできないワ……」

「なぜ？」ト仰あお向けざまにねころぶ拍子に、両手を頭に敷きながら、あたかも胸から押し出したような声で尋ねた。

「なぜといッてお前さん——アノ始末だものオ……」

少女は口をつぐんだ。「ヴィクトル」は袂たもと時計の鎖をいらいだした。

「オイ、『アクーリナ』、おまえだッてばかじやあるまい」トまた話しだした、「そんなくだらんことをいうのは置いてもらおうぜ。おれはお前まへのためを思ッていうのだ、わかッたか？ もちろんお前はばかじやない、ヤッぱりお袋しやうの性を受けてるとみえて、それこそ

徹頭徹尾^{てつとうてつび}いまのソノ農婦というでもないが、シカシともかくも教育はないの——そんなら人のいうことならハイと言ッて聞てるがいいじゃないか？」

「だッてこわいようなもの」。

「ッ、こわい。何もこわいことはちツともないじゃないか？ 何だそれは」、と「アクリナ」の傍へすりよッて「花か？」

「花ですよ」ト言ッたが、いかにも哀れそうであッた。

「この清涼茶は今あたしが摘^つんできたの」トすこし氣の乗ッたようす「これを牛の子にたべさせると藥になるッて。ホラ Bur-marigole——そばかすの藥。チヨイとごらんさいよ、うつくしいじやありませんか、あたし産れてからまだこんなうつくしい花ア見たことないのよ。ホラ Myosotis、ホラ堇^{すみれ}……ア、これはネ、お前さんにあげようと思ッて摘んできたのですよ」ト言いながら、黄ろな野草の花の下にあッた、青々とした Bluebottle の、細い草で束ねたのを取りだして「入^いりませんか？」

「ヴィクトル」はしぶしぶ手を出して、花束を取ッて、氣のなさそうに匂いを嗅いで、そしてもつたいをつけて物思わしように空を視あげながら、その花束を指頭でまわしはじめた。「アクリナ」は「ヴィクトル」の顔をジツと視詰めた……その愁^{しゅうぜん}然とした眼つ

きのうちになさけを含め、やさしい誠心^{まごころ}を込め、吾仏とあおぎ敬う気ざしを現わしていた。男の氣をかねていれば、あえて泣顔は見せなかったが、その代り名残り惜しそうにひたすらその顔をのみ眺めていた。それに「ヴィクトル」といえば史丹のごとくに臥^ねそベツて、グツと大負けに負けて、人柄を崩して、いやながらしばらく「アクーリナ」の本尊になつて、その礼拝祈念を受けつかわしておつた。その顔を、あから顔を見れば、ことさらに作ツた偃蹇恣睢^{えんけんしき}、無頓着な色を帯びていたうちにも、どこともなく得々としたところが見透かされて、憎かつた。そして顧みて「アクーリナ」を視れば、魂が止め度なく身をうかれでて、男の方へのみ引かされて、甘えきつているよう——アアよかつた！ しばらくして「ヴィクトル」は、……「ヴィクトル」は花束を草の上に取り落してしまい、青銅の框^{わく}を嵌^はめた眼鏡を外套の隠袋^{かくし}から取りだして、眼^めへ宛^{あて}がおうとしてみた、がいくら眉を皺^{しか}め、頬を捻じ上げ、鼻まで仰^あお向かせて眼鏡を支えようとしてみても、——どうしても外れて手の中へのみ落ちた。

「なにそれは？」と「アクーリナ」がケゲンな顔をして尋ねた。

「眼鏡」と「ヴィクトル」は傲然^{ごうぜん}として答えた。

「それをかけるとどうかなるの？」

「よく見えるのよ」。

「チョイと拝見な」。

「ヴィクトル」は顔をしかめたが、それでも眼鏡は渡した。

「こわしちゃいけんぜ」。

「だいじょうぶですよ」トこわごわ眼鏡を眼のそばへ持つてきて「オヤ何にも見えないよ」トあどけなくいつた。

「そ、そんな……眼を細くしなくっちゃいけない、眼を」トさながら不機嫌な教師のような声で叱った。「アクーリナ」は眼鏡を宛てがッていた方の眼を細めた。「チョツ、まぬけめ、そっちの眼じゃない、こっちの眼だ」トまた大声で叱って、仕替える間もあらせず、「アクーリナ」の持つていた眼鏡をひつたくッてしまった。

「アクーリナ」は顔を赤くして、氣まりわるそうに笑って、よそをむいて、

「どうでも私たちの持つもんじやないとみえる」。

「知れたことサ」。

かわいそうに、「アクーリナ」は太い溜息をして黙ってしまった。

「アア、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、どうかして、いっしょにいられるように

はならないもんかネー」トだしぬけに言ツた。

「ヴィクトル」は衣服の裾で眼鏡を拭い、ふたたび隠袋に納めて、

「それやア当座四五日はちツとは淋しかろうサ」ト寛大の処置をもつて、手ずから「アクリナ」の肩を軽く叩いた。「アクリナ」はその手をソツト肩から外して、おずおず接吻した。「ちツとは淋しかろうサ」トまた繰返して言ツて、得々と微笑して、「だが己^{やむ}を得ざる次第じゃないか？ マア積ツてもみるがいい、旦那もそうだが、おれにしてもこんなケチな所にやいられない、けだしモウじきに冬だが、田舎の冬というやつは忍ぶべからずだ、それから思うと彼得堡^{ペテルブルグ}、たいしたもんだ！ うそとおもうなら往^いツてみるがいい、お前たちが夢に見たこともないけつこうなものばかりだ。こう立派な建家、町、カイ社、文明開化——それや不思議なものよ……」（「アクリナ」は小児のごとくに、口をあいて、一心になツて聞き惚れていた）

「ト噺^{はなし}をして聞かしても」ト「ヴィクトル」は寝返りを打ツて、

「むだか。お前にや空々寂々だ」。

「なぜえ、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、わかりますワ、よく解りますワ」。

「ホ、それはおえらいな！」

「アクーリナ」は萎れた。

「なぜこのごろはそう邪慳じゃけんだろう？」ト頭をうなだれたままで言ツた。

「ナニこのごろは邪慳だと……？」ト何となく不平そうで「このごろ！ フフムこのごろ！……」

兩人とも暫時無言。

「ドレ帰ろうか」ト「ヴィクトル」は臂ひじを杖に起ちあがろうとした。

「アラモウちツとおいでなさいよ」ト「アクーリナ」は祈るように言ツた。

「なぜ？……暇乞いならモウこれですんでいるじゃないか？」

「モウちツとおいでなさいよ」。

「ヴィクトル」はふたたび横になツて、口笛を吹きだした。「アクーリナ」はその顔をジツと視詰めた、しだいしだいに胸が波だツてきた様子で、唇も拘攣こうれんしだせば、今まで青ざめていた頬もまたほの赤くなりだした……

「ヴィクトル、アレクサンドルイチ」トにじみ声で「お前さんも……あんまり……あんまりだ」。

「何が？」ト眉を皺めて、すこし起きあがツて、キツと「アクーリナ」の方を向いた。

「あんまりだワ、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、今別れたらまたいつ逢われるか
しれないのだから、なんとか一ト言ぐらい言ツたツてよさそうなものだ、何とか一ト言ぐ
らい……」

「どういえいいいうんだ？」

「どういえいいかしらないけれど……そんなこたア百も承知しているくせに……モウ今
が別れだというのに一ト言も……あんまりだからいい！」

「おかしなことをいうやつだな！ どういえいいいうんだ？」

「何とか一ト言ぐらい……」

「エーくどい！」ト忌々しそうに言ツて、「ヴィクトル」は起ちあがツた。

「アラかに……かにしてちようだいよ」ト「アクーリナ」は早や口に言ツた、かろうじて
涙を呑みこみながら。

「腹も立たないが、お前のわからずやにも困る……どうすればいいというんだ？ もともと
と女房にされないのは得心ずくじやないか？ 得心ずくじやないか？ そんなら何が不足
だ？ 何が不足だよ？」トさながら返答を催促する^{さいそく}ように、グツと「アクーリナ」の顔
を覗きこんで、そして指の股をひろげて手をさしだした。

「何も不足……不足はないけれど」ト^{ども}吃りながら、「アクーリナ」もまた震える手先をさしだして、「ただ何とか一ト言……」

涙をはらはらと流した。

「チョツ^{きま}極りを始めた」、ト「ヴィクトル」は平気で言ッた、後から眉間^{みけん}へ帽子を滑らしながら。

「何も不足はないけれど」ト「アクーリナ」は両手を顔へ宛てて、噉^{すす}り上げて泣きながら、ふたたび言葉をつ^つ続いだ、「今でさえ家にいるのがつらくつてつらくつてならないのだから、これから先はどうなることかと思うと心細くつて心細くつてなりやアしない……きつとむりやりにお嫁にやられて……苦勞するに違いないから……」

「ならべろならべろ、たとと並べろ」ト「ヴィクトル」は足を踏み替えながら、口の裏で言ッた。

「だからたッた一ト言、一ト言何とか……『アクーリナ』おれも……お、お、おれも……」不意に込み上げてくる涙に、胸がつかえて、言いきれない——「アクーリナ」は草の上へうつぶしに倒れて苦しそうに泣きだした……総身をブルブル震わして頂門で高波を打たせた……こらえに堪えた溜め涙の関が一時に切れたので。「ヴィクトル」は泣くずおれた

「アクーリナ」の背なかを眺めて、しばらく眺めて、フト首をすくめて、身を転じて、そして大股にゆうゆうと立ち去った。

しばらくたつた……「アクーリナ」はようやく涙をとどめて、頭を擡^{もた}げて、跳り上って、あたりを睥^うまわして、手を拍^うた、跡を追って駈^うけだそうとしたが、足が利かない——バツタリ膝をついた……モウ見るに見かねた、自分は木蔭^{こかげ}を躍りでて、かけようとする、と、「アクーリナ」はフト振りかえって自分の姿を見るやいなや、たちまち忍び音にアツと叫びながら、ムツクと跳^はね起きて、木の間へ駈^うけ入った、かと思うとモウ姿は見えなくなつた。草花のみは取り残されて、歴乱としてあたりに充^みちた。

自分はたちどまつた、花束を拾い上げた、そして林を去つてのらへ出た。日は青々とした空に低く漂つて、射す影も蒼さめて冷かになり、照るとはなくてただジミな水色のぼかしを見るように四方に充ちわたつた。日没にはまだ半時間もあるうに、モウゆうやけがほの赤く天末を染めだした。黄ろくからびた刈^{かり}科^かをわたって烈しく吹きつける野分^{のわき}に催されて、そりかえつた細かな落ち葉があわただしく起き上り、林に沿うた往来を横ぎつて、自分の側を駈^うけ通つた、のらに向いて壁のようにたつ林の一面はすべてざわざわざわつき、細末の玉の屑を散らしたように、煌^{かがや}きはしないが、ちらついていた、また枯れ草、莠^{はぐさ}、藁^{わら}

の嫌いなくそこら一面にからみついた蜘蛛の巣は風に吹き靡^{なび}かされて波たツていた。

自分はたちどまった……心細くなツてきた、眼に遮^{さへぎ}る物象はサツパリとはしていれど、おもしろ気もおかし気もなく、さびれはてうちにも、どうやら間近になツた冬のすさまじさが見透かされるように思われて。小心^{からす}な が重そうに羽ばたきをして、烈しく風を切りながら、頭上を高く飛び過ぎたが、フト首を回らして、横目で自分をにらめて、きゆうに飛び上ツて、声をちぎるように啼^なきわたりながら、林の向うへかくれてしまツた。鳩が幾羽ともなく群をなして勢込んで穀倉の方から飛んできたが、フト柱を建てたように舞い昇ツて、さてパツといっせいに野面に散ツた——ア、秋だ！ 誰だか禿山の向うを通るとみえて、から車の音が虚空^{こくう}に響きわたツた……

自分は帰宅した、が可哀そうと思ツた「アクーリナ」の姿は久しく眼前にちらついて、忘れかねた。持帰ツた花の束ねは、からびたままで、なおいまだに秘蔵してある……………

……

青空文庫情報

底本：「日本文学全集」 坪内逍遙・二葉亭四迷集」 集英社

1969（昭和44）年12月25日初版

入力：j.utyama

校正：八巻美恵

1998年7月28日公開

2006年1月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あいびき

イワン・ツルゲーネフ Ivan Turgenev

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 二葉亭四迷訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>